

## Beyond 5G推進戦略懇談会（第3回）議事要旨

### 1 日時

令和2年6月25日（木）17：30～19：00

### 2 開催方法

WEB会議による開催

### 3 出席者（敬称略）

構成員：

五神真（東京大学総長）、森川博之（東京大学大学院工学系研究科教授）、飯泉嘉門（徳島県知事）、内永ゆか子（NPO法人J-Win理事長）、木村たま代（主婦連合会事務局長）、篠崎彰彦（九州大学大学院経済学研究員教授）、竹村詠美（Peatix Inc. 共同創設者・アドバイザー）、徳田英幸（国立研究開発法人情報通信研究機構理事長）、藤原洋（株式会社ブロードバンドタワー代表取締役会長兼社長CEO）、根本勝則（一般社団法人日本経済団体連合会専務理事、代理出席：吉村隆）

総務省：

高市総務大臣、寺田総務副大臣、谷脇総務審議官、山田総務審議官、田原電波部長他

### 4 配付資料

資料3-1 「Beyond 5G推進戦略骨子」に対する意見募集の結果及び主な意見に対する考え方（案）

資料3-2 Beyond 5G推進戦略懇談会 提言（案）

参考資料1 Beyond 5G推進戦略（案）概要

参考資料2 Beyond 5G推進戦略骨子

参考資料3 「Beyond 5G推進戦略骨子」に対して提出された全ての意見

### 5 議事要旨

#### （1）開会

(2) 高市総務大臣挨拶

(3) 議事

①「Beyond 5G推進戦略骨子」に対する意見募集の結果及び主な意見に対する考え方（案）及びBeyond 5G推進戦略懇談会 提言（案）について

資料3-1及び資料3-2に基づいて、事務局から説明が行われた。

②自由討議

構成員からの意見は以下のとおり。

（森川座長代理）

本提言の方向性はすばらしく、これを契機に日本がぜひ元気になってほしい、そういうきっかけになってほしいと強く思う。しかし重要なことは、これに魂を入れてどのように動かしていくのかであるが、その点は、本提言には入っていないため、これから考えていかねばならない。検討ワーキンググループでもそこまでは議論はできていないため、本懇談会の構成員含め、様々な方々から意見をいただきながら、しっかりと進めていって欲しい。

戦略骨子に対して提出された意見にもあったが、技術で勝ってビジネスで負けるという事態が日本はずっと続いてきて、これを打破する一步を踏み出せるようにしたい。国の施策についても、産業界から喜んでもらえる動き方が必要と感じている。もう従来のやり方では厳しく、時代が変わったということを我々は認識しないといけない。技術だけでは社会が変わらなくなってきた。新しいやり方を模索していかなければいけないと思っている。そこで、やはり一番重要なのは人だと思っている。組織を含めた人。人と言っても技術者、研究者だけではない点が重要で、技術で勝ってビジネスで負けないようにするためには、イノベーションを生むことができる多様性を持たせた形で動かしていくことが重要と考える。今までの政府研究開発プロジェクトを振り返ると、やはり多様性が少し欠けていたと思っているため、研究開発だけではなく、事業開発（ビジネスディベロップメント）、知財、マーケティング、営業、広報など、様々な方々が集まりながら街というものを生み出して

いく、上手にまとめていく、そういう動き方をぜひ今回ファーストステップとしてトライして欲しいと強く思っている。

本懇談会は、五神座長をはじめ様々な先生が構成員となっているが、大学の先生も一種のツールであるため、そうしたツールやそれ以外も様々な組み合わせで盛り上げていく、考えていく場をぜひ作りたいと思っている。まとめると、これまでと似たような政策ではなく、「あれ？ 何か総務省、面白いこと始めたな」と思ってもらえる動き方をぜひお願いしたい。そのためには技術だけではなく、人にリソースをかけるというのも1つあると考えている。

(五神座長)

森川座長代理が仰るとおり、2030年にはデータ活用社会であるSociety 5.0が実現されているはずだが、科学技術だけでそこに到達することはできない。様々なセクターの多様な人が集まって議論し、また議論だけで終わるのではなく、行動に移す必要がある。それに産業界も効果的に関わられるようにしていく必要がある。今回、この総務省の施策に、経産省や文科省の施策も積極的に取り込んでいるということは、省庁を超えて行動するということについての決意の表れだと私は見ている。その施策をしっかりと実装するために、私たち大学も言葉だけではなく実際に行動していくことが重要。私も森川座長代理と連携していきたい。

(篠崎構成員)

3点意見を述べたい。まず、資料3-2の13ページ目で「我が国の強みがあるところ」という主語が入っている点は非常に大事だと思う。その文脈で資料3-2の15ページに「エッセンシャル・テクノロジー」を獲得していくとの記載がある。それらをグローバル・ファーストという文脈で「国内に」多様性を取り入れる戦略が組み立てられている点も重要。グローバルと言うと日本が外に出て行くことだけを考えがちだが、国内にも受け入れテストベッドとして様々なことに挑戦するという考え方が良い。

次に、10年というスパンの工程表の中で他省庁も巻き込んだ施策になっている点もポイントだと思う。本提言を1つのよりどころに、5Gを1つのエッセンシャル・テクノロジーと位置づけ、ICTに関係する様々なことを結集していくことが大事だと思っている。10年間というスパンの中で、適宜見直しをしながら、毎年、国際カンファレンスを開催するのも

進捗の緊張感が出てよい。もっとも、毎年毎年だと半ばルーチン化してしまう面もあるが、ちょうど5年目の大阪・関西万博を大きな中間目標、マイルストーンとして上手にとらまえているのもメリハリが利いていると思う。中間点の節目、山場として、ショーケースというか一種の見本市とすると同時に、単なるイベントのためというのではなく、イベント終了後は、それがそのまま次の時代を反映した新しい都市やまちづくり、社会生活として実装・展開されるような、まさに5Gの次（Beyond5G）を目指すきっかけになると良い。最初の5年間のカンファレンスもそういったものに結実するよう向けられると散漫にならない。コロナ後の社会とBeyond 5G、Society 5.0は、全てリンクしていると感じるため、こういうふうにはやっていけると良いのではないか。

3点目は、細かなことで、資料3-2の28ページ目などに「5Gソリューション提供センター」という表現があるが、「グローバルソリューションセンター」としてはどうか。高齢化などの日本の課題解決はグローバルな課題解決にもつながるし、環境問題などグローバルな課題の解決は日本の課題解決にもつながる。さらに、「5G」だけでなく「Beyond 5G」でも良いのではないかと思うため、「Beyond 5Gグローバルソリューションセンター」とするのも一計かと思う。

最後に、お願いというか希望として、グローバル・ファーストで国際カンファレンスを毎年開催することを考えても、ぜひ本戦略の英訳資料を用意して欲しい。エッセンス部分だけでも良いので、直訳の分かりにくい英語ではなく、ネイティブの人でもコンセプトが分かるものとして欲しい。日本はこういう方向に進んでいると、外国人と話をする様々な会議などの機会に組み込むことができるよう、パワポの資料も2～3枚あると良いのではないか。数年前の「IoT新時代の未来づくり検討委員会」では英語の資料を作っていて、それがその後、様々な国際会議などで役に立った。国際的な発信をし、国際的な仲間づくりや連携をしていく意味で、日本が何を考えているのかが見えないと上手くいかないので、ぜひ検討をお願いしたい。

（五神座長）

私もまさに、双方向のグローバル戦略を考えるべきだと痛感している。本懇談会が始まったのは新型コロナ感染拡大の直前、いわゆるプレコロナの段階であったが、それからすぐにウィズコロナを迎えた。そこでは、あらゆるセクターで旧来のビジネスモデルがリセットされる中で、日本の相対的な位置はむしろ非常に高まってきて、チャンスがきている

と実感している。例えば東大ではプレコロナの時に、半導体分野で台湾のメガファウンダリーと組んだり、量子コンピュータではIBMとの連携を進めてきた。彼らはウィズコロナのなかでもその連携の手を緩めるのではなく、むしろそれ以前以上に積極的に日本に接近してきている。したがって、ここで双方向の国際化をしっかり打ち出すのは、非常にタイムリーで、Society 5.0というモデルを実現する鍵になると思っている。日本はデジタル革新の活用によって、都市と地方の格差を解消し、多様性を尊重して包摂性を追求することで、シンガポールやエストニアといったデジタル先進国のスマート政府とは違った、スマートアイランド化の形を世界に示すことができる。これを2025年大阪・関西万博で発信できれば、強いアピールポイントになると思っている。

また、英訳資料を用意することについては、是非とも検討していただきたい。最近、自動翻訳の精度が上がっていることを実感しているので、それらを利用することもあわせて検討してはどうか。

(藤原構成員)

つい最近、スーパーコンピュータ「富岳」の世界一という忘れてはいけない成果があった。この成果はやはり連携すべきである。Beyond 5Gとスーパーコンピューティングの連携について、本提言に入れて欲しい。「富岳」は4部門（演算処理速度、アプリケーション利用、AI利用、ビッグデータ利用）で世界一になったが、Beyond 5Gにとっても、この4部門で世界一であることは非常に重要で、また、タイムリーだと思う。

理化学研究所の方と話していても、基地局配置のシミュレーションや、アプリケーション効率、実効伝送速度の高速化などについて、ぜひ「富岳」を使って欲しいということであった。他省庁連携として、スーパーコンピューティング世界一に続いて、Beyond 5Gのテクノロジー世界一を、このスーパーコンピューティングの技術を使って実現すると提言できれば良い。

(五神座長)

「富岳」が世界一になったことはちょうど記憶に新しく、非常に分かりやすい。ぜひそれをうまく活用することで、本提言を伝えていく上でも非常に良いツールになると思うので、検討していきたい。

(片桐電波政策課企画官)

「富岳」については、資料3-2の17ページにおいて、「SINETやスーパーコンピュータ「富岳」等の研究基盤」との連携と明記している。今後、文部科学省とも、どのように活用できるかについて話し合いたい。

(徳田構成員)

森川座長代理から魂を入れることが大事だという指摘があったが、私も同じ印象を持っており、今後、Beyond 5G又は6Gに向けて10年間、国を挙げての総力戦だと考えている。コロナのため、この3か月で約10年分のデジタル化ががっつんと社会の中に浸透してきたが、まず、本提言中の体制を早急に確立させて動き出させる必要がある。Beyond 5G(「/6G」と付けるべきかもしれない)は、特に海外との連携も大事で、日本が既にBeyond 5G/6Gに向けて動いている、産官学連携で動いているというフラグを立てることが第1ステップと考えている。

第2ステップとしては、民間の企業、例えばトヨタは将来のスマートシティに向けての実験のフィールドを提供することとしているが、こうした先端的なアイデアを持っている企業とも連携し、積極的に実証フィールドを日本各地に幾つか、シティ規模のレベルで作ることができれば、特にICT業界以外の方がこうしたフィールドに入ってきて、ユースケースを広げてもらうことができる。こうしたことが非常に大事である。

また、今般のコロナのため、どこまでがテレワークでできて、どこまでは向いていないかが分かってきたと思う。例えばクリエイティブな活動をしようとするのが難しい。大学でも実験室に行って実験ができないので、分身ロボットを使って体験型の環境は作れないかなど、様々苦労しているところ、そうした課題を解決できる実証フィールドを作りたい。

第3には、森川座長代理のコメントのとおり、人がやはり肝腎だということ。例えば、企業には何人か専門の方もいるが、3GPPへ持っていく標準化戦略を議論できるような人材や、オープン・アーキテクチャに長けているAIの研究者をBeyond 5Gの研究コミュニティに巻き込んでいく、若い世代も含めた新しい人材をコンソーシアムを中心に巻き込めると非常に良い。

最後に、NICTでは、量子ICTの分野が次期中長期計画において非常に大事だと考えている。このBeyond 5G/6Gのアプリケーションの先に、Quantum Key Distribution Networkなども連携し、次の量子ICTの布石とし、10年先には量子インターネットのプロトタイプが日

本の中で動くような環境ができると良い。先ほど藤原構成員からスーパーコンピュータの話があったが、日本国内で汎用の量子コンピュータの開発も進んできている。量子リピーターができなければいけないという技術的な課題はあれど、日本が量子ICTの分野でも先を走っているということを世界にアピールできればと考えている。

(五神座長)

人財が大事というときには、ぜひ大学を積極的に活用いただきたい。量子分野も非常に重要で、先ほど述べたとおり、東京大学でもIBMとの連携で日本に量子コンピュータの実機を設置するなど、いま様々な連携を進めているところ。私は専門に近いこともあり、インターネットそのものについても、コヒーレンスを上手く運べるよう変えることをBeyond 5Gでは視野に入れていくべきだろうと、常々思っている。ぜひ、本提言からさらに先に進んで、今後そうしたアクションも出てくると良いと思っている。

(木村構成員)

本提言には、緊急事態や利用者視点について丁寧に記載されており、ありがたい。今般のコロナにより、世の中の状況は随分変わってしまったというのが実感である。今回のような感染症が起これば、望むと望まざるとにかかわらず、こうしてWEB会議など通信を使わざるを得ない。はじめは右往左往していたが、いざ使ってみると、「意外にできるよね」という声もあったところ。やはりこういうことは普段から想定しておかねばならないと考え、緊急時にどうするかという視点がきちんと記載されている点は、大変重要。

今回、私からは、利用者視点について強調をした。やはりこういう技術というのは、確かに開発された技術は大変素晴らしいが、それをどうやって使っていくかが重要となる。もう一言言うと、この技術がBeyond 5Gであると利用者が気付かないで当たり前になってしまふのが本当は理想ではないかと考えている。そのためには、標準化や、誰でも利用できるようにすることが重要であるし、SDGsの目標にもあるとおり、一人も取り残さないということが求められる。

そして、今般のコロナにより、医療分野や学習分野など様々な分野で、省庁の、また地域の壁を乗り越えてしまった。ある意味、とても良いことだった部分もあるし、もちろん問題もかなりあると思うが、こうした点を含めて、今後、考えていかなければいけないのではないか。

ユーザ視点ということで1点述べたい。本提言に「ユーザオリエンテッド」という表現がある。これは利用者視点という意味だが、一般の消費者からは、このように片仮名の言葉が多いと、難しいから嫌だよねとか、やっぱり意味が分かりにくいとなりがちであるし、特に片仮名は、雰囲気流してしまっただけで、本当の意味を理解しないで使ってしまうこともある。したがって、なるべく分かりやすく実用化を見据えた上で利用者視点に立つためには、そうした分かりやすい言葉で的確に伝えることも重要と考えている。また、これから本戦略を進めていく上で新たな課題が出てくると思うが、それらにもきちんと対応して積み重ねていくことが大切だと思う。

最後に、大阪万博については、子供のときにわくわくしたあの気持ちを、2025年に子供たちに伝えるような万博になるようにしたいと願っている。人を養成するという意味で、子供たちにぜひ夢を与えていただきたい。

(五神座長)

片仮名語については、あえて使う必要がない部分まで片仮名で表記されていないか、事務局でもチェックしてほしい。

大阪万博については、私も少しプランニングに関わっているが、このタイミングで準備を始めることは、非常にチャンスである。現存するほとんどの施設がコロナに対応できない、三密を避けることができない構造になっている中で、大阪万博はポストコロナを見据えて施設を計画できるぎりぎりのタイミングであるため、このチャンスをとらえて、ポストコロナの世界が夢多きものになるようなイメージが出せると良い。

(内永構成員)

久しぶりにわくわくするような提言となっていると思う。

本提言中、実際のネットワーク上の様々な機能を載せてユースケースを構築するという記載があるが、Beyond 5Gの世界になったときには、むしろビジネスモデルが変わってくると思うので、ユースケースも一部含むだろうが、Beyond 5Gをベースにしたイノベーションハブを作り、そこに大学、研究所、ビジネス（企業）も、みながその中に入り、そこで新しいビジネスモデルを作り上げていくことが必要ではないか。場合によってはファンドも入ってもらい投資をしてもらう。よくボストンなどがイノベーションハブと言われているが、日本の場合、Beyond 5Gをベースにしたイノベーションハブとして、もっと思い切って

広げてみたらどうか。その際は、1箇所だけではなく、日本で2箇所か3箇所をつなげ、Beyond 5Gイノベーションハブ1、2、3というように、大胆なビジネスモデルを試してみることが大変意味があるのではないかと。そういう意味でも、「ユースケース」という言葉は、少し古い感じがするため、もっと思い切り新しい発想ということではいかがだろうか。大学も企業も研究所も、また投資家も一緒に集まって、Beyond 5Gの世界がどうなっていくのか考えていくと、かなり具体的な形として見えてくるのではないかと期待している。また、その際、やはり日本だけでイノベーションハブを作るとはどうしても限界があるため、海外の様々な拠点とも組んで、このイノベーションハブを、Beyond 5Gという格好で、新しいモデルを若い人たちがチャレンジするような発想で考えていかねばならない。

Beyond 5Gというプロジェクトを10年間という形で実行する際に難しいのが、体制づくりとマネジメントシステムだと思う。様々な省庁、組織が関係し、様々な思いが入ってきたときに、これを1つの方向に引っ張っていくためのいわゆるマネジメントシステム、組織づくり、また、それをどう評価して持っていくのかについては、大体の方向性を今から考えておく必要があるのではないかと。その観点で、いつもお願いしていることだが、政府としてより明確に、その責任省庁を作って欲しい。さもなくば、責任部隊がその時々で流れていくおそれもあるため、やはり、デジタル、Beyond 5G、これらを総括した形の責任部署を明確にし、そこに優秀な人材を集めて、国策の基本的なバックボーンとして進めて欲しい。

本提言はよくまとまって素晴らしいと思うが、多分一番のチャレンジは、これをどう実行していくかだと思うので、その実行のために、何をどう持っていくのが良いかをぜひ検討して欲しいし、私としては、やはり組織と責任と、それから人というものを明確にすることが極めて大事であると考え、ぜひ検討して欲しい。

(五神座長)

非常に同感である点が多くあった。「ユースケース」という言葉を、どの程度、修正すべきかという問題はある。ここでのユースケースとは、「Beyond 5Gの新しいビジネスモデルの中で使うもの」というイメージを表していると思うが、提言の読み手が、プレコロナのビジネスモデルにおけるユースケースをどうしてもイメージしてしまうという、ずれが生じる可能性もある。御指摘のあった点が際立つような工夫、修正ができると良い。

また、最後のイノベーションハブ構想は、かなり大きな話だが、コロナによってあらゆ

るセクターでビジネスモデルが切り替わっているタイミングだからこそ、今やるべきだと私も思っている。そういった発想の切替えをしない限りは、本提言は絵に描いた餅になることはまず間違いない。ロードマップにあるとおり、ちょうど日本では第6期科学技術基本計画が年度内に議論されて来年度から開始されるため、Beyond 5Gについても書き込めると良いと考えているし、私が参加している未来投資会議などでも主張していきたい。

本提言の中でどのぐらい書けるかは、本提言の位置づけなども考えながら事務局と相談したい。

(竹村構成員)

ユースケースや人材の面で、補足的にコメントをしたい。

まず、他の構成員からも指摘のあった人材について。Beyond 5G、既に今の4Gでもそうだが、やはり大きなユースケースの主役は、世界にいる若者である。日本は人口が高年齢化してきているが、世界で見ると、やはりデジタルコンシューマーの大部分は若者だと思う。恐らく今の高校生以下は、デジタルネイティブとして、インターネットが始まって商用化されてきた頃に生まれた子供たちで、本当に小さい頃から使いこなしていると思う。例えば異能vationプロジェクトにもすばらしい子たちが大勢いると思うが、彼らの国際連携などをもっと高校生ぐらいの低年齢なときから積極的に行っていく、つまりビジネスレイヤーの一步手前のパーソナルなレイヤーのところから国際連携をしていくことで、シーズの前段階から人間的な関係性も含めて、新しいマーケットをつかんでいくことも大切なのではないかと思っている。ぜひその育成にも力を入れて欲しい。

次に、大阪万博は世界にポストコロナ時代の6Gの在り方を提案していく良い機会だと私も思っているが、さらに日本らしさと、日本が世界と違うリーダーシップを出していくという意味では、社会包摂的な6Gというアピールが考えられる。今はどちらかというと、国民と政府との対立の文脈で、世界でコロナが語られていることも多いが、日本の場合はSDGsなど、国民に優しい6G、社会包摂的な6Gということで、デジタル政府により、ヘルスケアなどの生活に密着した部分が6Gでさらに国民のためになっていることを大阪万博で出していけば、非常に世界に注目されるチャンスではないか。

さらに、外国人の方が6Gを使うことでより働きやすくなる。自動的に通訳して仕事ができる環境は2025年までに恐らく整ってくると思う。諸外国では労働市場に外国人を入れたくないという動きも起きてきているところ、逆に日本は積極的に優秀なアイデアのある外

国の方と、6Gで協働していくと本提言にも記載されている。大阪万博に向けて、外国の方が、バーチャルプロジェクトチームなどで日本のエンジニアやマーケターとコラボレーションを進めていくことで、ユースケースや実証が企業にも実装されていき、外国の方とリアルタイムで一緒に仕事をするのは当たり前という世界がより加速的に6Gを使って早まっていくのではないかと期待している。

(五神座長)

デジタル革新により物理的に離れた人々がつながる結果、インクルーシブな社会ができるということまで主張しているところに、Society 5.0を提唱した日本の先進性があると私は捉えているので、大阪万博で日本が世界に注目されうるということは、まさに仰るとおりだと思う。

先日、北京大学と東大でオンライン会議システムを使った学長ホットラインを実施した際、彼らは中国語で、こちらは日本語で同時通訳を交えて会話をしていたが、遠隔会議であったにも関わらず、ほとんどストレスなく会話ができた。ここで体験したようなことは、Beyond 5Gではさらに相当進化するはずであり、その時代で活躍するはずの、現在の中高生にあたる世代を早めに巻き込む必要があるという点は、まさにそのとおりだと思う。

(根本構成員 (吉村代理))

Beyond 5GをSociety 5.0のバックボーンとして位置づけ、COVID-19の感染拡大への対応、感染終息後の成長戦略を見据えたものとして本提言は作成されており、改めて賛同したい。

Beyond 5Gの実現に向けた前提として、まずは我々としては、5Gを徹底的に活用して動くことが大事と思っており、現状不十分と感じている。それをしっかりと進めつつ、Beyond 5Gの推進に取り組むという方向が望ましい。引き続き、本戦略の実行に向けて官民一体で取組を進めていきたい。

1点質問だが、これから戦略の実行が大事になってくるところ、本懇談会の今後の検討の進め方について、共有いただきたい。

(片桐電波政策課企画官)

基本的に本戦略を取りまとめた後は、実行フェーズということで、コンソーシアムを立ち上げ、それを母体として強力に進めてまいる。

また、本懇談会については、節目節目にまた御意見をいただきながら、必要があれば戦略自体をさらに修正していきたい。

(五神座長)

Society 5.0のバックボーンとしてBeyond 5Gを位置づけたほうが良いと、私も強く思っている。本提言が、技術開発がこれからどんどん進んでいき社会実装が進む際に、方向を間違わないよう、Society 5.0に正しく向かうためのガイドになり、全体的にシナジーを生み出すことができるのではないかと。

(飯泉構成員)

非常にチャレンジングで良いものが出来上がっており、大変期待をしている。そこで、1つのストーリーとして意見を述べる。

大きなテーマとして、日本は技術開発は良いのだが、ビジネスで負けてしまうことが挙げられていたが、これだけは、本提言をきっかけとして大きく改善をすべきではないかと思うところ。というのは、本戦略の主語は「我が国の企業」であるため、やはりこの点は分析と改善をする必要がある。では世界でどういう企業が勝ってきたのか。これは政府が、ほかにも同業他社があったにもかかわらず、徹底的に個社の得意分野に国費を投入し、その企業がまさに世界で冠たる企業になり、それがひいてはその国の税収増に貢献することになり、その政策の信頼も高まっていったのではないかと。日本も大きく舵を切り替えて、この分野を一番得意とする企業に徹底的に国の税制、国費を投入する。また、財政投融資も、新幹線や公共事業だけではなく、まさにこうした分野に投入すべきではないか。その意味では、ウィズコロナ時代となって、ワクチンの開発に世界がしのぎを削っているが、全国知事会から国に一気にここに大きなお金を投入すべきだと申し上げており、ぜひこの分野に入れるべきだと、こうした点を御理解いただきたい。

今回は方向性としてグローバル・ファースト、そして双方向性とされている。世界がウィズコロナ時代となって、日本の奇跡と世界からは言われている。コロナの優等生というドイツが今、ロックダウンをしている中、日本の対処の仕方に世界中の目が集まっているのであれば、今こそ世界的なオープンイノベーションを働きかけし、大阪・関西万博をターゲットとし、世界中の人材や企業へ、この日本というフィールドでの協力を呼びかけたい。

前回は「大阪万博」だったが、「大阪・関西」と「関西」と入れたのは、実はなかなか勝負が厳しく、大阪府から日本で初めてのいわゆる都道府県域を超える意思決定機関、関西広域連合として誘致をしていこうという事情があった。徳島もそのメンバーであり、今、2府5県、4政令市で大阪・関西万博を成功に導いていこうとしている。コロナウイルスの感染が拡大する前に決めたことだが、主要テーマを「いのち輝く未来社会のデザイン」として、サブテーマで「いのちを救う」、「いのちに力を与える」、「いのちをつなぐ」と「いのち」を3つ並べている。まさに「いのち」がテーマとなっているわけで、2025年にはウィズではなくアフターコロナとし、世界から大きく注目をしていただく。あるいは否が応でもせざるを得ないため、これを実施する側として、方向性を示していただいているのは非常にありがたいところ。我々としても、しっかりと成功に導きたい。

まず大阪万博までの話を述べたが、やはりその後の5年も考える必要がある。今回、事務局案としても、「空、海、そして宇宙、あらゆる場所へ」と書かれているところ、ぜひ大胆なムーンショットをどんどん打つことによって、世界の注目を日本に集めさせる必要があるのではないか。かつてユビキタスを打ち上げたが、関西万博が「いのち」や人に関わっているところであるため、ぜひ「あらゆる人に」を加えると良いのではないかな。

最後に、この世界中の状況を変えるものは今般のコロナと、これから変わるであろうというのが、先ほどからコメントのある量子コンピュータの存在である。量子コンピューティングの話もぜひこの中に加えて、そして日本が世界一を目指し、今回これをきっかけとして遅れを取り戻すよう、全国知事会としても全面的に協力をしたい。

(五神座長)

ウィズコロナでもう1つ、国民が気が付いたことは、自治体の底力である。その意味でも、大阪・関西万博をマイルストーンに据えたことは、非常に象徴的で良いプランになっていることを再確認した。

量子分野については、東大も今かなり本格的に取り組んでいるので、ぜひ本提言にもつなげていきたい。

③Beyond 5G推進戦略懇談会 提言(案)については、上記の議論を踏まえて修正することとなった。修正については座長に一任され、必要な修正を加えた上で戦略の公表を実施することとなった。

(4) 寺田総務副大臣挨拶

(5) 閉会

以上